

世界の名作を讀もう!

新編 読書 主筆 野矢 浩一

附属図書館長 陣崎 克博

大学生であることの真骨頂は読書にあると私は思っている。気軽に図書館を訪れ、本や雑誌を読んだり借り出したりしてもらいたい。コンピューター端末により図書情報のオンライン検索をなし、資料を使ってレポートや論文を書いてもらいたい。文献の探し方や資料の使い方がわからないときや、あるテーマについてどんな文献があるかを知りたいときは参考調査係に相談するとよい。語学学習用カセットテープや教養ビデオも視聴してほしい。CD-ROM（コンパクトディスクを利用した読み出し専用メモリー）も使ってみるとよい。

とにかく、図書館を大いに利用してもらいたいのである。

さて、受験勉強に明け暮れ、ゆっくりと読書をするいとまもなかった新入生諸君に、入学を機に強く要望したいのは、古今東西の古典、特に世界文学の名作を読破することである。

古典とは、長い年月の鑑賞を経て、現在もなお高い評価を受けている作品である。それに現代の名作を加えてもよい。世界や人間などについての根本原理を追求しようとする哲学書もあろう。人類の歴史と文明に思いをはせる歴史書や、社会のいろいろな現象を究明する社会科学関係書もあろう。しかし私は、なかんずく、文学作品としての古典的名作を勧めたい。

なぜならば、それが古きよき愛と叙情・夢とロマンの世界との出会いを教えてくれ、人間としての生きざまを深く考えさせてくれるからである。人間の根源的な問題、人生の苦悩や悲惨な状況を描いた作家たちの苦悩や体験を、追体験・追思考することによって、人間というものの本質や深奥を、かいま見るこ

とができるからである。長い人生の遍歴のなかで、失敗したり、挫折や絶望を感じたり、人生のどん底に落ちたとき、こういう古典的な文学作品を読んだ経験が、君を支える大きな力となってくれるからである。人間とは人生とは愛とは、こんなにもすばらしく、美しく、深く、悲しく、罪深いものであることを思い起こさせ、挫折から立ち直らせる契機を与えてくれるからである。

以下に、ほんの参考として、独断と偏見に満ちてはいるが、私が選んだ十冊を列挙してみよう。

1. スタンダール『赤と黒』
2. ロマン・ロラン『ジャン・クリストフ』
3. シェークスピア『リア王』
4. ホーヅン『緋文字』
5. スタインベック『怒りの葡萄』
6. ゲーテ『若きウェルテルの悩み』
7. ヘッセ『車輪の下』
8. ドストエフスキー『罪と罰』
9. 夏目漱石『三四郎』
10. 幸田露伴『五重塔』

村上春樹や宮本 輝や片岡義男が入っていないからといってクレームをつけないでほしい。私が旧制高校生のころ、『ジャン・クリストフ』をあまりの面白さに夜を徹して読み続け、読み終えたときは夜もしらしらと明けていたあのときのあの感激を、諸君にもぜひ味わっていただきたいと思うのである。

古典には汲めども尽きせぬ味わいと深みと広がりがある。名作を読むことによって、良書と悪書を識別する鑑識眼を養い、読書習慣を形成し、人間としての幅を大いに広げてもらいたいのである。